



EXCLUSIVE INTERVIEW WITH
LEZ ZEPPELIN
ZEPトリビュート・バンドとして
注目のデビューを果たした女性バンドが
ZEPの1stアルバムを完全コピーした新作を完成!

by Jun Kawai

ニューヨーク出身の女性だけによるLED ZEPPELIN (以下ZEP) のトリビュート・バンドLEZ ZEPPELINが、ZEPの名曲をカバーした1stアルバム「LEZ ZEPPELIN」(2007年)に続く2ndアルバム「LEZ ZEPPELIN II」(2010年)を完成させた。今回はZEPの1stアルバム「LED ZEPPELIN」(1969年)を丸ごとカバーするというもので、彼女達のZEPに対する研究成果がさらに現われたような内容になっているが、そもそも何故ZEPのカヴァーを始めたのか、その辺りの話から訊いてみることにした。

—まず、バンド結成の経緯から教えていただけますか？

ステフ・ペインズ(以下S): このバンドを始めたのは2004年頃よ。当時、ZEPをかなり聴いていて、文字どおり恋に落ちていたの。(笑) 再発見した感じ。理由は判らないけど、それまでに聴いたどんな時よりも、素晴らしく聞こえていたわ。(笑) それで、この音楽を実際に自分でプレイしたら、どんなに楽しいかしらと思って、プレイすることに決めたのよ。(笑) そして、楽器が演奏出来る女の子を探し始めたの。それで、人前でプレイするようになったんだけど、大勢の人達に気に入ってもらえたから、女性だけというのがとても良いアイデアだというのは、すぐに明らかになったわ。

—あなた自身はLEZ ZEPPELIN以前はどういう活動を？

S: ニューヨークで色々なタイプのバンドでプレイしたわ。イングランドにもしばらく住んで、色々なグループでプレイしていたし…。でも、LEZ ZEPPELIN以前の一番最近の活動は、ロニー・スペクターとのツアー。60年代のガール・グループのスター、THE RONNETTSのロニー・スペクターよ。実はロニーとのツアーで1999年に東京の『Sweet Basil』という会場で1週間プレイしたことがあって、あれが日本との出会だったわ。そのすぐ後に、LEZ ZEPPELINをスタートさせたの。

—アメリカには色々なバンドのトリビュート・

バンドが存在しますが、LEZ ZEPPELINを始めると、参考になったバンドはありますか？

S: いえ、私はこのバンドをとっても素朴な、何も知らない状態でスタートさせたの。(笑) トリビュート・バンドがどんなものなのか知らなかったし、そういうものが存在していることすら知らなかった。純粋にZEPが大好きで彼らの音楽をプレイしたいと思ったから、自分の考えでやり始めたことだったの。でも、実際にバンドを組んでプレイするようになって、シーンには数え切れないほどのトリビュート・バンドが存在していることを知り、驚いたわ。そして、それに気付いてからは、彼らと同じことはやらないようにしようと思ったの。実際、私達がやっていることは、ルックスもZEPのようにして、彼らと同じ衣装を着けたり、まったく同じように動いたり、常に一音違わずプレイしようとしたらといった、他のバンドがやろうとしていることとは違うと感じたわ。私達はトリビュート・バンドではない、とね。だから、(トリビュート・バンドの) サーキットには加わずに、主にオリジナル・ミュージックを演奏させるクラブでプレイすることで、自分達の道を開拓することにしたの。それがこのバンドのためにもなったと思うわ。信頼性も高まったと思う。独自の道を進むことが出来るようになったと思う。

—でも、2008年のLEZ ZEPPELINの来日公演を観た時、あなたは衣装から使用ギター、アクションまでジミー・ペイジを真似していましたか？

S: そう思った？(笑) 面白いわね！(笑) —かとって、他のメンバーはあなたほどは似せようとしていませんでしたが、そもそもどういうスタンスでバンドを始めたのですか？

S: (少し考えて) 言いたいことは判るわ。私がやっているのは…まったく同じ格好をしようとは思っていないのよ。(笑) 確かにドラゴン・スーツは持っているから、きつとあれを着ていたのね。(笑) でも、微妙な境界線があると思うよ。観に来てくれた人には「ZEPの音楽がライブで演奏されているのを観たり聴いたりしたとしたら、どうだったろうか？」というのを追体験してもらい

たいから、その音楽のスタイルは確実に取り入れたいわ。自分のソコを弾く場合だって、「ジミーだったらこうプレイしていたかもしれない」という、確実な根拠に基づいたプレイをしなくちゃいけない。でも、この音楽が心地よくプレイ出来るようになったら、少し探検してみるのには素晴らしいことだと思う。その本物のスタイルの領域内でも、私はジミーが演奏している様子を沢山のビデオを観てきたし、彼のソコも今では本当に熟知しているから、音楽的に彼のような考え方が出来るようになってるのよ。でも、私達は、彼ら(ZEP)の役を演じようともしていないし、ウィッグをかぶって真似しようなんてことはやっていないわ。

—なるほど。よく判りました。ところで、来日公演の後、あなたを除くメンバー全員が入れ替わりしましたが、何が起こったのですか？

S: あの時のバンドは自然に寿命が来たんだと思うわ。私以外のメンバーが、少しずつ興味を失いつつあったの。そうになったら、何もかも変える必要がある。だから、あの時点で変えるのは自然なことだったの。LEZ ZEPPELINのラインナップは、ここまで何回か変わっているわ。でも、それって健全なことだと思うの。このバンドの場合、メンバーが替わることで、まったく新しい活気を与えてくれるし、私のオリジナルのヴィジョンにどんどん近づいているの。

—新しいメンバーはそれぞれどのような経歴の持ち主なのですか？

S: ベース・プレイヤーのミガン(トーマス)はニューヨークでいくつかのオリジナル・バンドでプレイしていたわ。シンガーのシャノン(コンリー)も歌って生計を立てていて、色々なグループで歌ってきたし、色々なショウに出演したりしてきた。声優/ナレーション・アーティストというキャリアの持ち主でもあるのよ。とてもユニークな声の持ち主だから、アニメやTV番組などで、そういう仕事もしているの。それから、ドラマーのリーサ(スクワイアーズ)はテキサスで数え切れないほどのバンドでプレイしてきたわ。

—今回の2ndアルバム「LEZ ZEPPELIN II」はZEPのデビュー作「LED ZEPPELIN」を丸々

コピーした作品になっていますが、何故こういうアルバムを作ろうと思ったのですか？

S: 最初(1stアルバムを作る時)に考えていたオリジナルのアイデアは、すぐに「LEZ ZEPPELIN I」からスタートすることだったの。それが私達がプレイすべき音楽だと考えていたのよ。でも、色々な事情から、それは実現出来そうにないことが判ったの。大勢の人達がZEPの後期の音楽も聴きたがっているのは明らかだったから。それに、率直に言って、1stアルバムを作った時のバンドは、「LEZ ZEPPELIN I」をやる準備がまだ出来ていなかったと思うの。「LED ZEPPELIN」はたぶん最もユニークな…そして、私にとってはZEPのアルバムの中でもたぶん最も素晴らしい作品だと言えるわ。ブルーズも沢山入っていて、とても即興性が高い。取り組む相手として一番難しいのは間違いないとは思っていたわ。前のラインナップのバンドは、それほどブルーズ漬けにはなっていなかったけど、今のバンドはブルーズに深く入り込んでいるわ。それも理由の一部よ。でも、オリジナルのコンセプトに戻って、もう一度最初からスタートしようと思っただけなの。そして、ペリー・マーゴットとウィリアム・ウィットマンという素晴らしいプロデューサーと一緒に仕事することに決めたとわ。ペリーは、世界でもトップ・クラスのアナログ・スタジオを持っていて、ヴィンテージ・ギターを扱う仕事もしているから、沢山の機材を所有しているの。まさにあの時代の機材をね。私達は、「LEZ ZEPPELIN」と同じ時代の機材を使って、最も本物に近いやり方でアルバムを作って、本当にあのサウンドを作ることにしたのよ。

—実際、各楽器のサウンドはZEPの当時のアルバムとそっくりなので、驚きました。

S: ええ。基本的には、ジミーがいくつかのソコをレコーディングしたのに使ったであろう同じSuproのアンプと、同じ1959年製のレス・ポール、1948年製のテレキャスターといったヴィンテージ・ギターを使ったのよ。そして、あのレコードをあれほどじっくり聴き込んだことも、素晴らしい経験になったし、とても勉強になったわ。どんな楽器のどんな音色も、ディストーションの量も、イコライザーのレベルも何もかも、全部詳細に調べたの。どんなエフェクトがどれくらいかけられているか、ワウが使われていたら、その音はどうやって作られたかといったことも何もかも。とにかく、その音にピタリ合うまで、とことんやったわ。2日間かかったギター・サウンドもあったわ。アンプも色々試して、もしかしたらSuproではなくVOXのAC30を使ったかも、という風にやっていったの。そうやりながら、あとはヴォーカルというところまで到達したんだけど、ヴォーカルが入る前のトラックを聴いたら、LEDかLEZか、どっちがどっちだか私達にも区別が付かなくなっちゃったわ。勿論、演奏に関してもそう。私達はとても正確にやったわ。ギターのラインくらいなら同じに弾けそうなのだけど、聴き返してみると違うのよ。音は同じかもしれないけれど、その音をどこでカットするか、どういう風にヴィブラートをかけるか、どのフレットでその音を出しているか…そういったことでまったく違うように聞こえてしまう。そこまで細かくやっていくと、耳がどんどん良くなるのよ。前は聞こえていなかったものが自分の耳に聞こえてくるの。本当に驚いてしまうわ。私達は完全に取り憑かれてしまったのね。(笑) 全員がそうだけれど、私自身、前

よりもずっと良いミュージシャンになったと感じているし、今はこれまではなかったほど詳細に、何でも聞こえるのよ。

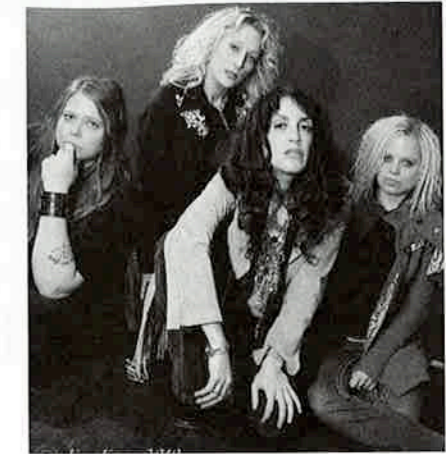
—例えば、「I Can't Quit You Baby」のギター・ソロでのジミー・ペイジの独特なピッキングのニュアンスもしっかりプレイしています。

S: ええ。
—ペイジのプレイにはどういった特徴があると分析していますか？

S: 良い質問だわ。ジミー・ペイジに関して私にとって一番難しい部分は、彼の演奏には驚くほど様々な影響が取り入れられているという点よ。ジミーは、総てのプリティッシュ・ロック・ギタリストの中で最も多才だわ。本当にそうよ。元々彼はセッション・ミュージシャンだから、とにかく沢山のスタイルを身に付けておくにはいけなかったし、彼はそれをとても上手くやったのね。ジミー・ペイジになりたいと思ったら、ロカビリーを習得しなくてはいけないし、初期のロックン・ロールのギター・リフも全部学ばなくてはならないわ。一般的に、非常にクリーンなギターで弾かれていて、カントリー・リフのように聞こえるの。それから、ケルティックのフォーク・ミュージックも身に付けておくにはいけない。彼はプリティッシュ・フォーク・ギターやケルティック・ミュージックを沢山取り入れているから、フィンガー・ピッキングの繊細さも身に付けておくにはいけない。それから、勿論ブルーズがあるわ。そういった様々なものが彼のプレイに入り込んでいるから、彼のようなサウンドを出そうと思ったら、指を本当に使わなくてはならないと思うの。私もそれをやったりし、元々のルーツにも入り込んだわ。

でも、ジミーのプレイには、トレードマークとまではいかなくても、彼がよく弾く傾向にあるリフというのもあるの。私はそれが何か判っているから、彼ならこうするんじゃないかというのが判るのよ。それから、彼が音を出す時にやる、独特のアタック法がある。私は“貨物列車のような”という表現を使いたくなるんだけど、彼は独特のエネルギーとパワーを込めて、音を叩き出すのよ。彼のソコは、まるで滝のように流れ落ちてきて、聴く者を水浸しにする。それから、彼は非常にダイナミックでもあるわ。彼の演奏には爆発的な要素がある。それには慣れなくてはならないし、感覚として掴むしかないんだと思うわ。それとロカビリー・タイプのヘヴィなヴィブラートもそうね。習得するしかない、強烈なヴィブラートが彼にはあるわ。でも、それをどこでもやっているわけじゃなくて、決まった場所だけ使えないの。どこで使えるのか、使っても無駄なのはどこなのか、何なのか、それを知っておかなくてはいけないのね。とても繊細な違いなんだけど、それを上手く使えるかどうかで、本物に聞こえるか聞こえないかが決まるんだと思うわ。(笑)

—歌に関しては、前任のサラ・マクレランは自



(l. to r.) Leesa Harrington-Squires<ds>, Shannon Conley<vo>, Steph Paynes<g>, Megan Thomas

分のスタイルで歌っていましたが、シャノンはロバート・プラントを意識して歌っていますね。

S: ええ。このアルバムの意味を考えたら、ロバート・プラントのニュアンスまで捉えることが大事だと考えたのよ。私達が音楽的にも遥かに近いことをやっているのと同じようにね。それに、シャノンの方がロックン・ロール・シンガーなのよ。彼女の声の方がプラントに似ているの。彼女の声にはブルーズもある。ブルーズ・ロックのハスキーさもあるわ。だから、彼女は自然により近く歌っているのよ。完璧に真似しようとしたわけではないけど、意識的にオリジナルにより近づけようとしたわ。

—今後、LEZ ZEPPELINの2ndアルバム、3rdアルバムとカバーしていく予定ですか？是非、「IN THROUGH THE OUT DOOR」(1979年)までライブ・ワークとして続けてください。

S: (笑)…長い旅になるわね！(笑) ええ、既に「LEZ ZEPPELIN II」に着手する計画を立てているわ。どこまで行けるかやってみる。(笑) お婆さんになって、車椅子のお世話になっているかもしれないけど。(笑) でも、出来るだけ早く取り掛かりたいと思っているの。前作と今回のアルバムの間はほとんど空いてしまったから、あんなには空けたくない。それに…やらない手はないでしょ？(笑)。

—最後に、今後の予定を教えてください。

S: 日本に行きたいと希望しているのよ！もしかしら10月という話も出ているけど、それが実現することを私達は心から願っているわ。次回はもっとギグをやりたいし、日本をもっと見たいわね。それから、年末にはヨーロッパに行く予定もあるし、アメリカ・ツアーももっとやるわ。このアルバムが9月に出たら、あらゆる人達の前でこの音楽が演奏出来るようにしたいわね。どこへでも行ってね！(笑)

LEZ ZEPPELIN



2007年 エイベックス
CTCR-14584
※ ZEPのカヴァー6
曲+オリジナル2曲で
構成されたデビュー
作。日本盤にはライブ
2曲をボーナス追加。

LEZ ZEPPELIN II



2010年 エイベックス
ス/サウンド・ウォー
AVCD-38137
※ ZEPの1stアルバム
を丸ごとカヴァーした
新作。9月8日発売。
P.191のアルバム・レ
ビューも参照。